



Title	「育児不安」研究の限界：現代の育児構造と母親の位置
Author(s)	岩田, 美香
Citation	教育福祉研究, 3, 27-34
Issue Date	1997-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28317
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_P27-34.pdf



「育児不安」研究の限界

—現代の育児構造と母親の位置—

はじめに

乳幼児を抱える母親が、わが子をかわいいと思う反面、子育てに困ったり悩んだりすることは、どの時代、どの母親にも少なからず見られることであろう。しかし、近年、母親の子どもや子育てに対する不安感や嫌悪感については、「育児不安」・「育児ノイローゼ」あるいは、「子どもの虐待」として社会問題化し、マスコミでも大きく取り上げられると同時に、子育てや母親についての主要な研究テーマの一つとなっている。

こうした状況は、表面的には子育てを知らない母親や自分の子どもを愛せない母親が増えたことなど、母親個人に関する要因によって説明され、「子育てが下手になった」母親たちへの批判に結びつきやすい。しかし、多くの母親たちのパーソナリティ特性が、この10数年で、それほど大きく変化したのであろうか。仮に、母親たちに変化があったとしても、そこへと母親を追い込んでいった周囲の社会的要因が存在するはずであり、そこに目を向けていかなければ、子育ての「現代的」な特徴も見いだすことはできないであろう。実際、最近の研究では、母親を取り巻く要因に目を向けており、そこでは「母親の出産前の子どもとの接触の少なさ」、「家族とりわけ夫の協力の少なさ」、「社会的に孤立した子育て」、そして「固定的な性別役割意識に対する問い直し」等々として、「育児不安」の高まりが説明されている。

ここでの目的は、社会問題化している現代の子育てに対する、既存の「育児不安」研究の妥当性を考察し、新たな分析枠組みの提出を試みることである。すなわち、子育てをしている母親の心理を示す際に、キーワードとして用いられている「育児不安」という言葉が、何をとらえており、また、社会全体の子育ての困難さをどこまで説明できているのかを検討する。「育児不安」という言葉にか

かわった母親のネガティブな感情については、妊娠期から出産期前後にあたるマタニティ・ブルーの研究も多いが、ここでは、乳幼児期の子どもを育てている母親の心理的・社会的問題に絞って、「育児不安」研究の動向を中心に見ていく。

1 「育児不安」とその測定

(1) 「育児不安」とは何か？

子育てをしている母親のネガティブな感情を表す用語としては、先にあげたように「育児不安」・「育児ストレス」・「育児ノイローゼ」・「育児疲労」など様々であるが、これらの用語の明確な定義や相互の関連、相違点についての説明は、ほとんど成されていない。しかし一般には、これらを代表する形で「育児不安」が用いられ、「育児不安」という用語を用いることによって、母親の子どもや子育てに対する心配ごとや不安、そして嫌悪感をイメージするケースが多い。すなわち、子育て全般についての困難な状況や危機状況にある母親の心理的側面をとらえ、すべて「育児不安」という用語で代表させていると考えられる。

むしろ、「育児不安」を感じる対象は母親だけではなく、父親の「育児不安」についての報告も一部に見られる⁽¹⁾。だが、乳幼児の子育ての実際がまだまだ母親中心であること⁽²⁾からすれば、ここではとりあえず母親の「育児不安」について検討すれば、その目的は十分に達成されうであろう。また、子育てをしていく上での不安は、乳幼児期の子どもをもつ母親に限ったことではなく、子育て全般にわたっており、子どもの発達段階に応じて、その内容は変化しながら存在するものである。しかし、「育児不安」をもちやすいとされている母親が育てている子どもの年齢は、乳幼児である場合が多く、小学生や中学生の母親の「育児不安」研究はほとんど見られない⁽³⁾。それは、乳幼児を育てるといふことの身体的疲労の大きさ⁽⁴⁾による

ものであるとも推測できるが、後にも述べるように「育児不安」自体が、そのように「限定された」ものとして扱われていることを意味する。

ともかく「育児不安」という用語が使われるようになったのは、学術的には1976年の高橋・中の論文⁽⁶⁾においてであり、その後、育児・助産婦雑誌を通じて1980年代に普及し始めたとされている⁽⁶⁾。その中でも、先駆的に「育児不安」の尺度化を試み、母親を取り巻く社会的要因に注目して、一連の研究を実施したのが牧野カツコである。

彼女のとらえる「育児不安」とは、「子どもの現状や育児のやり方などについて感じる漠然とした恐れを含む不安の感情。疲労感や焦り、イライラなどの精神状態を伴う。悩みや恐れはそれを引き起こす特定の対象があるのに対して、不安は明確な対象がなく漠としている。」⁽⁷⁾であり、「いわゆる健康な育児行動を阻害するような一種の負荷事象を主観的に表明したもの」⁽⁸⁾である。

ここでの「育児不安」は、「不安の感情」であり、しかも「疲労感・焦り・イライラ」といったあらゆるものを含んだものとして説明されている。この定義は、当初は次に述べる「育児不安」尺度作成のための操作的定義であったが、未だ、この説明をより明確にする定義付けは成されてはおらず、母親のネガティブな感情の中の何をもって「育児不安」というのか、その対象は曖昧なまま残されている。

その後の研究動向は、牧野の「育児不安」尺度をもとにして、「育児不安」の様々な関連要因を検討していく流れと、とらえにくい「育児不安」が何であるのかを探るために母親のパーソナリティ特性との関連性を見ていく領域とに大別することができる。前者については2節において取り上げるので、後者についての結果を見ると、深谷・植木⁽⁹⁾が行った「CAS不安診断検査(慢性不安)」、松本⁽¹⁰⁾が行った「YG性格検査の抑鬱性尺度」ともに、牧野の「育児不安」尺度との関連性が実証されている。すなわち、「育児不安」と呼ばれている状況には、その基底に高不安状態の存在を仮定することができ、抑鬱度との関連性も深いといえ

るのである。これらの結果は、母親の内的傾向が慢性的不安であったり抑鬱傾向であるほど「育児不安」を起こしやすいことを示唆しているが、こうした母親の精神症状に注目して「育児不安」を説明していくのであれば、「育児不安」の問題は母親個人のパーソナリティ特性の問題へと焦点化していくことになってしまう。

(2) 牧野による「育児不安」尺度

前項で見たように、「育児不安」という対象そのものが漠然としており、内容も無限定的(diffuse)な性質であり、母親自身も不安の状態を明確に意識しているとは限らないことから、その調査や測定には困難さがあることは、牧野自身も述べている。そこで彼女は、その特性が似ていることから、産業疲労測定のための「蓄積的疲労徴候調査」⁽¹¹⁾を参考にし、育児不安の尺度化を試みた。

「蓄積的疲労徴候調査」とは、「症状」ではなく「徴候」という表現をとった」とあるように、労働者が産業疲労によって「病的」であるのか「健康」であるのかを調べようとしたものではない。むしろ、それ以前の問題として、労働者の労働・生活条件が、彼らの「健康な」生活の維持増進を阻害するものとなっていないかどうかをとらえようとしたものである。そこでは、負荷事象(超過負担)を主観(感情)への投影という形で把握しようとして試みている。すなわち、一定の時点で発現される主観の状態を問うのではなく、「何日間か継続して、あるいは停留して感じられるような症状徴候を調べる」というものである。牧野は、「育児不安」の問題が、「いわゆる健康な育児行動を阻害するような一種の「負荷事象」を主観的に表明したもの」であり、この「蓄積的疲労徴候」の問題と共通するところが多いと考えたのである。

牧野の「育児不安」尺度の作成では、育児期の母親達が自分達の生活感情や意識を表明した言葉を、新聞の投書、乳幼児学級等での発言を中心に収集し、次の五つの特性に対応する表現に分類していく作業を経て、調査項目を採用している⁽¹²⁾。五つの特性とは、I. 一般的疲労感、II. 一般的気力の低下、III. イライラの状態、IV. 育児不安

徴候、V. 育児意欲の低下であり、これは先の「蓄積的疲労候調査」の特性を参考にしている。

牧野の「育児不安尺度」による具体的な調査項目は、次の14項目である⁽¹³⁾。

- | |
|---|
| <p>I. 一般的疲労感を測定する項目</p> <p>①毎日くたくたに疲れる。(N)</p> <p>②朝、目ざめがさわやかである。(P)</p> <p>II. 一般的気力の低下を測定する項目</p> <p>③考えごとがおっくうでいやになる。(N)</p> <p>④毎日はりつめた緊張感がある。(P)</p> <p>III. イライラの状態を測定する項目</p> <p>⑤生活の中にゆとりを感じる。(P)</p> <p>⑥子どもがわずらわしくてイライラしてしまう。(N)</p> <p>IV. 育児不安徴候を測定する項目</p> <p>⑦自分は子どもをうまく育てていると思う。(P)</p> <p>⑧子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある。(N)</p> <p>⑨子どもは結構一人で育っていくものだと思う。(P)</p> <p>⑩子どもをおいて外出するのは、心配で仕方がない。(N)</p> <p>V. 育児意欲の低下を測定する項目</p> <p>⑪自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう。(N)</p> <p>⑫育児によって自分が成長していると感じられる。(P)</p> <p>⑬毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う。(N)</p> <p>⑭子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う。(N)</p> |
|---|

それぞれの項目について、「よくある」～「ほとんどない」までの4件法で得点化して計算し、個々の母親の「育児不安」の高低が出されるのである。

2 「育児不安」と育児困難

(1) 「育児不安」研究の限界

牧野の育児不安尺度の有効性は一連の研究⁽¹⁴⁾において、また、本村他の研究⁽¹⁵⁾においてもおおむね良好であると評価されたが、育児不安得点の低い母親については、本村が次のように指摘をしている。「子どもに関心の低い母親は、育児不安徴候を表しにくく、育児全般の問題を考える上では、こうした、無関心な母親の問題も決して無視できない」のであり、「不安の低い母親」は、だから問題がないとは限らず、筆者は、不安が低ければ低いほど「健康」な「望ましい」母親であるとは言えないと考えている。」すなわち、「育児不安は、母親ならば、だれしもある程度はもっているものである。問題は不安があることではなく、その不安が病的なほどに高く、通常の判断力や感覚のバランスを失うことにある」と述べている。

こうした問題提起をもとに、牧野自身も彼女の育児不安尺度についての問題点を指摘し、調査項目の内容的妥当性の検討、および、「育児不安」そのものの再検討も行っている⁽¹⁶⁾。そこでは、「育児不安」が「過度の母子一体（接近）の感情とイライラや子ども嫌い（離反）の感情の両極性をもつものであり、ともに「育児における負荷事象」であることを改めて確認」している。ここで、新たな概念の説明が成されているが、それは「育児不安」の範囲をさらに広げるものであり、注意すべきは、ここでも「育児不安」を「負荷事象」とし、「（育児不安が）低い場合は、より健康的」と、とらえていることである。

子育てにおける母親の困難さやその意識を「育児不安」という枠組みでとらえようとするとき、「育児不安」そのものの対象の曖昧さと、「育児不安」としてとらえられない層の母親たちが存在してしまうという問題点が残されてしまうこととなる。こうした問題点は、「育児不安」尺度の精度を上げることによって解決できるのであろうか。岩田は、本村他や牧野自身の尺度に対する指摘も含めて「育児不安」尺度の改訂と構造化を試みた⁽¹⁷⁾。そこ

では、これまで「育児不安」として、ひとまとまりのパッケージとして測定されていたものから、「生活疲労」・「母親の充実感」・「育児不安」という3つの要因（3要因全体を「母親の不安尺度」と呼んだ）を見いだすことができた。しかし、社会全体の母親を対象とした尺度として用いる際には、本村他の指摘を克服しようとしたにもかかわらず、同様の問題点が残されてしまった。すなわち、被調査者が社会階層全体の母親を反映できなかったという限界に加えて、数量的に測定することから生じる「不安が低い」という母親の中の、「健康的な」子育てのために「低い」という結果が出ている母親たちと、「子ども・子育てに無関心」なために「低い」という結果が出てくる母親たちとの違いを区別することができなかったのである。

これらは、「育児不安」研究が用いてきた方法および対象把握から生じる限界である。母親たちを不安得点の高低で振り分け、不安の高いグループに位置する母親を分析していく限り、こうした問題点は克服できない。

(2) 「育児不安」と育児困難

これまでの「育児不安」研究の限界は、「育児不安」解決策の提起の限界ともかかっている。「育児不安」の軽減の一助となる「育児不安」に関連する「要因」としては、しばしば「母親の社会的な活動」・「母親のもつネットワーク」・「夫との関係」・「他の子どもとの比較」などがあげられている⁽¹⁸⁾。

しかし、母親をサポートしていくという立場から、これらの「要因」をみたとしても、やはり、あらゆる階層の母親を対象とした不安解消の鍵とはなりえない。社会的な活動や「ネットワーク」といった主体的な活動によって自らの社会的関係を構築あるいは広げることができない母親たち、また、先に問題となった「不安が顕在化しない母親たち」は、その「要因」自体を欠落させている場合が多いからである。それゆえ、母親の孤立・孤独化が育児不安につながりやすいのである⁽¹⁹⁾。

また、最近注目されている「夫」についても⁽²⁰⁾、夫の協力と同様に、あるいはそれ以上に、夫に対する妻（母親）の評価が「育児不安」に関して、より重要であると報告されている⁽²¹⁾。この場合の具体的な対応は、夫自身が妻（母親）のおかれている子育て状況の困難性を理解し、精神的な面だけでもその困難さを共有することが要求される。しかしこれだけでは、「育児不安」の原因も解決も、最後には「母親の気持ちのもちよう」や「それぞれの夫婦仲」の良し悪しに帰されてしまうことになる。

こうした限界を克服するためには、対処療法的にはなく、より広く構造的に母親をあるいはその家族を規定している社会的要因を考慮していかなければならないであろう。なぜならば、現実には様々な階層や状況にある家族に対して一律の要求やサポートプログラムを提供することは、時として一部の家族・親を追いつめてしまうことになり、その不利益を被るのは社会的に弱い立場にある家族の場合が多いからである。

さらに、このことは、これまでの「育児不安」研究そのものが、結果的にはあれ、一定の「階層性」を帯びてしまった、すなわち、とらえられた「育児不安」というものが、現代社会における、ある一定階層の育児困難という現実の一部を心理的レベルでとらえたものであったにすぎなかったことを意味している。

しかし、子育ては、ある一定の階層における母親だけが行うものではなく、「育児不安」を感じている母親たちに加えて、先にあげた「育児不安」を感じない・感じている暇がない母親たちにも、意識とは別の実際的な行動レベルでの「育児困難」は生じているはずである。しかも、その「育児困難」は、一様のものではなく、個人の状況に加えて社会的な「育児構造（階層性）」をもって表れる。したがって、マスコミで取り上げられるような「高学歴」で「自由時間が増加」し、数少なくなった子どもとの「母子カプセル」の中での母親がもつ「育児困難」や「育児不安」と、極端な例では、生活保護受給世帯や母子世帯の母親がもつ「育児困

難」や「育児不安」とは、一部分共通したものはあっても、同じものとはならないであろう。これらは、どちらも子育てにおける困難を抱えている母親、家族であり、それぞれの問題性は取り上げられているものの、いまのところ、常に分断されて説明されており、両者を組み入れた包括的な理論は提出されていない。

したがって、今後の育児不安研究について明らかにしてゆくべきことは、従来のように「育児不安」という枠組みで切り取ってきた母親の特性だけを問題とするのではなく、どのような生活を営んでいる（生活条件にある）母親が、どのような内容の子育ての困難さをもち、それをどのように感じているのかを見極めていくことである。それによって、「育児不安」の相対的な社会全体における位置、さらに「育児不安」というものが、どのような子育てをしている母親にとっては感じるもので、どのような母親たちには感じないものであるかについても客観的に説明することができる。

3 現代の育児構造と母親の位置

子育てにおける「不安」だけでなく困難を説明しうる分析枠組みの構築のためには、単に母親の心理的レベルの「育児不安」でもなく、母親やその家族の自助努力に集約されてしまう「環境」でもない、「社会的次元」からのアプローチが必要となる。ここでいう「社会的次元」とは二つある。一つは現代社会特有の問題であり、今一つは階層的差異の問題である。

前者についていえば、まず「母親である」ということが、「女性」としての生き方との葛藤を強いられることがあげられる。母親たちは、「母性」ということばで象徴される固定的な性役割の中で、また、同性である女性たちの社会進出が高まっていく中で、「母親である」ということだけでは、自分自身のアイデンティティをもちにくい状況にある。現代において「母親」という存在は、外部からも、そして母親自身の内面からも揺さぶりをかけられている。

加えて、現代の子育ての特徴としては、その母

親に子育ての担い手が集中している。渡邊はこれを、現代家族の育児構造の特徴として示している⁽²²⁾。現代の家族は、核家族のシステム境界が鮮明となり、社会の育児機能が核家族に独占・集中されるという単純な育児構造にある。こうした構造のもとでは、親以外の育児の担い手は、親を介して間接的に子どもとの関係を結んでいる状態となり、家族外部の諸主体の育児作用は、親によるスクリーニング（ふるい分け）を経て、子どもに達することになる。すなわち、家族外部の養育（育児）に関わる主体と親がどのような関係を取り結ぶのかが、子どもの育児構造を規定する。家族の外部にどのような育児主体が準備されているか、どのような育児資源・育児機会にアクセス・コントロールしうるかによって子どもの育児構造は規定されるのである。

それゆえ、育児の担い手が母親に集中し、母と子どものパッケージが孤立しているという社会的に共通した特徴のもと、母親たちは様々な資源・情報を取捨選択し、ますます母親はコーディネーターとしての役割が重視される。そして、その役割が強まれば強まるほど、母親の精神的負担は増加していくと予想される。こうした役割は、現代社会が母親に対して要請しているものでもある。実際、母親たちは、子どもの環境のため、胎児・乳幼児期から多様な選択をし、環境をコーディネートしている。それは、早期教育といった教育的なものに限らず、幼稚園や保育所の選択から友達づくり、おもちゃ、衣服、スポーツ、体験学習などといった、子どもに関するあらゆるものに及んでおり、容易に「育児産業」と結びつきやすい性格をもって現れる⁽²³⁾。もはや、現代の家族が育児機能を担うに足る資源を保持することは不可能であり、家族に期待される役割は、家族外部の育児資源をコーディネートすることであるといえる⁽²⁴⁾。

このように考えてくると、現代の育児を担っている母親の困難や不安を明らかにし、そのサポート対策を具体化していくためには、あらためて「母親の立場」に焦点をあてる意義の大きさが理解さ

れるであろう。そのためには、育児資源をコーディネートするという母親の主体的な決定プロセスの中で、どのような困難や不安が生じているのかを明らかにすることが、とりわけ重要である。

さらにいえば、この母親の主体性に注目した視点は、先に述べた、育児困難があるはずなのに「育児不安」を見せないような母親の問題をとらえ直すという意味においても重要となる。一般に、社会的に弱い立場にある生活困難層の家族は、社会的制約が大きい（常に受動的な立場（援助を受けるだけの立場）にあると思われがちであり、彼女らに対するアプローチも固定的な実態把握が多い。しかし、彼女たちは、問題解決に向かって努力していないというわけではなく、努力してもできない状況におかれており、その結果として問題未解決という状況が残されているととらえた方が、実態に近い⁽²⁵⁾。したがって、これはまた、近年、母子家庭を「欠損家族」ではなく、家族の再組織化の過程としてとらえるという視点が提出されている⁽²⁶⁾）ように、家族の「能動的」な活動という立場に則して、私的に営まれている子育てが社会的に制約されている部分を明らかにすることにもつながるからである。

ところで、渡邊のこのような現代の育児構造の中での、母親の育児不安や育児困難をとらえるためには、すでにくり返し述べてきたような「社会階層」という概念を入れて分析を具体化しなければならない。しかし、いわゆる「静態的」な階層的視点だけで分析していくのでは、社会階層と個々の母親の育児行動にかかわった困難や不安の把握との間に距離がありすぎるといった問題が生じる。実際、同じような階層にある母親でも、過度にコーディネートしてしまう母親から、コーディネートすること自体を放棄してしまっている母親たちまで、広く存在している現実を説明できないからである。

そこで、その問題を埋めるために、従来の社会階層区分に用いられるような収入や財産、学歴、職業に加えて、母親の実際の問題解決や危機を乗り越える際に操れる（コーディネートできる）、よ

り流動的・操作的な「資源」という概念を考慮する必要がある。ここでSandra Wallman⁽²⁷⁾にならって、その「資源」を区分すれば、前者を「構造的資源 (Structural Resources)」、後者を「編成的資源 (Organizing Resources)」と呼び、後者では時間・情報・ネットワークなどを考えることができる。

このような枠組みでみていくと、母親がコーディネートできる編成資源が、その家族の構造的資源によって、いかに規定されているか、また、その編成資源の違いによって、母親が取り組んでいる子育て（資源のコーディネート）に、どのような違いが現れるのかを明らかにしていくことができる。これは、「育児構造」を（階層的差異を入れて）より具体的にとらえ、その中で「育児困難」や「育児不安」をみていく視点でもある。そうした枠組みを通してはじめて、母親の「育児困難」や「育児不安」といったものの相対的な性質や相互の関連もまた説明できると思われる。

注・文献

- (1) 専業主夫になった父親も「育児不安」になったという事例としては、吉田義仁『僕らのパパは駆け出し主夫』朝日新聞社、1992年。また、父子家庭の父親の育児不安に注目したものとしては、渡邊 秀樹「父親の育児不安」大日向雅美・佐藤達也編『現代のエスプリ 342 子育て不安・子育て支援』至文堂、1996年などがある。
- (2) 働く母親が増加し、M字型就労の底辺は上がってきているが、子どもの年齢が3歳未満で見ると73.3%、3～5歳で見ても63.3%が、専業主婦による子育てをしている。
『児童をとりまく世帯の状況』厚生統計協会、1995年。
- (3) 牧野カツコ「中学生をもつ母親の生活と意識」『家庭教育研究所紀要』第5号、1984年。
- (4) 乳幼児の育児に専念している主婦の疲労は、産業疲労でいうと航空管制官や新聞社のキーパンチャーに匹敵する労働で、夜勤型の慢性疲労とほぼ同等であるという。

佐々木保行・佐々木宏子・中村悦子「乳幼児をもつ専業主婦の育児疲労(第1報)」『宇都宮大学教育学部紀要』29、1979年。

佐々木保行・佐々木宏子「乳幼児をもつ専業主婦の育児疲労(第2報)」『宇都宮大学教育学部紀要』30、1980年。

(5) 高橋種昭・中一郎「母親の育児不安の構造に関する研究——母親の地域社会に対する関心度と育児態度——」『日本総合愛育研究所紀要』第11集、1976年。

(6) 川井尚・庄司順一「「育児不安」これまでとこれから」『子ども家庭福祉情報』第10号、1995年。

(7) 『新社会学事典』の「育児不安」の項目、有斐閣、1993年、p.36。

(8) 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉」『家庭教育研究所紀要』第3号、1982年、p.35。

(9) 深谷和子・植木陽子「母親の不安に関する一考察」『東京学芸大学紀要1部門』37、1986年。

(10) 松本由里「現代の母親の悩みとその背景」『母子研究』No.16、1995年。

(11) 越川六郎「蓄積的疲労徴候調査について」『労働の科学』2月号、1975年。

(12) 牧野、前掲書、1982年。

(13) 項目中、(P)は肯定的な方向を、(N)は否定的な方向を示しており、得点化においては(P)の得点のコンバートを行った。

(14) 牧野、前掲書、1982年。

牧野カツコ「働く母親と育児不安」『家庭教育研究所紀要』第4号、1983年。

牧野カツコ・中西雪夫「乳幼児をもつ母親の育児不安——父親の生活および意識との関連」『家庭教育研究所紀要』第6号、1985年。

牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」『家庭教育研究所紀要』第9号、1987年。

(15) 本村汎・磯田朋子・内田昌江「育児不安の社会的考察——援助システムの確立に向けて——」『大阪市立大学生活科学部紀要』第33巻、1985年。

(16) 牧野カツコ「〈育児不安〉の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要』第10号、

1988年、pp.25-26。しかし、ここでの指摘に基づいた尺度改訂は、成されていない。また、注(15)にあげた本村他についても、指摘に対する尺度の改訂には取り組んでいない。

(17) 尺度の採用の過程や尺度の内容については、次の文献を参考のこと。

岩田美香「育児期の母親の心理および生活とソーシャル・ネットワークの活用」修士論文(未公刊)、1994年、北海道大学。

岩田美香「育児期の母親の不安とソーシャル・ネットワーク」『北海道大学教育学部紀要』第68号、1995年。

(18) 牧野、前掲書、1982年。

本村他、前掲書、1985年。

岩田、前掲書、1994年。

(19) 春日キスヨ・佐々木正美・汐見稔幸・大日向雅美・佐藤達哉「座談会——子育て不安の現状とその背景」においても、子育て調査の全般的傾向からの報告として、「一言で言えば、孤独、孤立が育児不安につながりやすい」と述べている。しかしここでも、本文に述べたような「育児不安」関連要因が欠落しているような社会的に最も孤立しがちな母親たちの存在は問題とされていない。

大日向雅美・佐藤達哉 編『現代のエスプリ 342』前掲書、p.7。

(20) 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子『父親の発達と父親の役割』ミネルヴァ書房、1996年、および、柏木恵子編『父親の発達心理学』川島書店、1993年など。

(21) 牧野、前掲書、1982年・1985年。

岩田、前掲書、1994年。

(22) 渡邊秀樹「現代の親子関係の社会的分析——育児社会論序説」社会保障研究所編『現代家族と社会保障』、1994年。

(23) 汐見稔幸『幼児教育産業と子育て』岩波書店、1996年。

(24) 渡邊秀樹、前掲書、1994年、p.86。

(25) 杉村宏・岩田美香『単親(父子母子)家庭生活実態報告書』、北海道民生委員児童委員連盟、1996年。

(26) 藤崎宏子「母子寮世帯の家族解体——再組織過程

— 方法論的検討 — 『家族研究年報 No.5』家族問題研究会、1979年。

松浦勲「離別母子世帯の生活構造 — 家族解体と再組織化を通して」『高知大学教育学部研究報告』第一部第40号、1987年。

- (27) 「構造的資源 (Structural Resources)」と「編成的資源 (Organizing Resources)」という資源のシステム理論は、Sandra Wallman によって提出されている。彼女は、社会的弱者も、よりよい資源を求めて自分たちの置かれた状況を改善する力を持っているという前提に立ち、様々なカテゴリーに属する都市の住民が、どのような資源の選択を行い、また、制約を受けているのかを明らかにしたのであるが、その際に、従来の経済的資源モデル、すなわち

土地 (住宅)・労働 (サービス)・資本 (商品とお金) という構造的資源 (ハード) に加え、時間・情報・アイデンティティの3つを生活のソフト面にあたる編成資源として導入した。しかし筆者は、この編成資源にネットワークを加えたい。というのも、母親と子どもが孤立している現状に注目した点からも、母親が社会の中で取り結ぶネットワークの量と質の把握は重要となる。これらは、時間や情報の資源活用を分析することで得られるような、間接的な分析では不十分と考えるからである。

Sandra Wallman (1984) *Eight London Household*. Tavistock Publications Ltd., London. (福井正子 訳『家庭の三つの資源』河出書房、1996年)
(岩田美香・北海道大学教育学研究科博士後期課程)